

平成 8 年度 修復処置概報

修復技術部

1. 彩色文化財の保存修復

重要文化財法界寺壁画の修復前調査を行った。硬性鏡等を用いて壁内部の状態を観察し、壁画表面の汚れや過去の修復に使用されたと思われる試料を採取し、溶解性試験や成分分析を行った。(増田勝彦・川野辺涉)

重要文化財嚴島神社高舞台の漆塗り塗装の劣化状況調査と温湿度・紫外線強度の測定を行った。さらに劣化状況の著しい南側側面の一部にいくつかの塗装仕様による試験塗装を施し、塗膜内部の構造と劣化傾向との関連を見る現地暴露試験を開始した。(川野辺涉)

重要文化財水戸・八幡宮の解体修理工事に際して、当初の建築彩色を復元するために斜光ランプやデジタルカメラによる画像処理の指導を行った。(川野辺涉)

2. 金属文化財の保存修復

重要文化財和歌山市大谷古墳出土金属製品、高崎市山名原口古墳出土象嵌遺物などの修復処置を実施した。大谷古墳出土の馬面の修復は昨年に引き続き行っているが、修復前に比べて構造がよりよく理解できるようになり、考古学上の新しい知見が得られた。象嵌遺物の処置は、プラズマ処理法の技術的改良をはかるため行った。その結果比較的脆弱な遺物でも象嵌線を痛めることなくプラズマ処理を行うことが可能になった。

重要文化財宇都宮市清巌寺鉄塔婆、高さ 3 m ほどの鎌倉時代の紀年銘がある塔婆で、鏽が激しく銘文部分が剥落する危険があったため、本年度より二カ年計画で修復事業がはじまった。鏽のクリーニングと炭酸アンモニウム系防鏽剤を使用する脱塩処理の指導を行った。(青木繁夫・犬竹和)

3. 出土木製品の保存修復

昨年、千葉県館山市大寺山洞穴遺跡の乾燥した砂質土壤中から発掘された木製舟棺をポリシロキサン樹脂(商品名ビフォロン)を浸透させ強化して取り上げた。舟棺は、千葉県文化財センターへ運ばれ、そこで仕上げのための修復が行われることになった。舟棺表面に付着する土等の清掃を行った後、破片はエポキシ樹脂で接合し、大きな亀裂部分には木粉とビフォロンの混合物を、小さな亀裂には纖維素系接着剤(商品名セメダイン C)と木粉の混合物を充填して補修することにした。(青木繁夫・森恭一)

4. 遺跡・遺構の保存修復

史跡千葉市加曾利貝塚には、貝層断面と住居跡が保存施設の中に保存展示されているが、最初の保存処理を行ってから 30 年ほどが経過して遺構表面の汚れ等が目立ってきたが、水洗いなどの

クリーニング方法では、遺構を痛める危険性が大きく本格的なクリーニングが行えなかった。そこで YAG レーザによるクリーニング実験を行ったところ貝層や住居跡表面の埃やカビ等の汚れを遺構を痛めることなく効率よく除去する事が出来た。平成 9 年度より本格的なクリーニング処理を実施する予定である。(青木繁夫)